

東京共同会計事務所様

| | |
|------|--|
| 所在地 | 東京都千代田区丸の内3-1-1 国際ビル 9階 |
| 設立 | 1993年8月 |
| 従業員数 | 150名 |
| 業種 | 会計事務所 |
| 事業内容 | 会計・税務コンサルティング バリュエーション業務デュー・ティリジェンス 及びその他の保証業務、フィナンシャル・アドバイザー業務 ピークル管理業務 |
| URL | http://www.tkao.com/about/index.html |
| 導入製品 | TRAVENTY V SuperVision / TRAVENTY 管理者ツール |



USBメモリは原則禁止、 厳正なデータ管理

東京共同会計事務所
システム・ソリューション部 部長

海田 雅人 氏



システムソリューション部
矢島 真氏(左) 海田 雅人氏(右)

会社概要

会計・税務関連サービスに従事する部門と金融関連役務提供サービスに従事する部門を備えることにより、多岐に渡る取引事案、総合的なサービスを提供することを強みとしている。また、サービスの品質に関しても、深い知的研鑽と専門的な実務経験に裏打ちされた顧客本位のサービスを提供することを行動規範とし、それを着実に実践。その結果として、その活動は日本及びアジアにおける有力な事務所として、国際的にも高い評価を得ている。

セキュリティUSBメモリの主な利用用途

クライアントとのデータ授受、オフラインPCとのデータ移送

USBメモリは原則禁止

東京共同会計事務所では会計業務だけでなく、ファンドの管理委託業務にも携わる。

そのため、通常業務としてクライアントとのデータ授受が発生する。大切なクライアントのデータを厳正に管理するため、4年以上前からIT機器の資産管理ソフト、LanScopeCATを導入。データの社外持ち出しを防ぐため、USBメモリも使用禁止とした。

「大枠の社のポリシーとして会社の外には正規の対象先(クライアント)以外に対してはデータを持ち出さないというポリシーがあります。そのため、データの持ち出しに関しては厳正に管理をしています。ただ、どうしても業務として発生してしまうクライアントとのデータ授受、そこに対してのみ貸出運用という形式でセキュリティUSBメモリを導入しました。」と同社の海田雅人氏は導入の背景について語る。

貸出用のセキュリティUSBメモリは資産管理ソフトとほぼ同時に導入。当時顧客とのデータのやり取りはデータをZIPで暗号化したものをCD-Rに焼いて授受をしていたが、

CD-Rでの受け渡しを嫌うクライアントや容量の大きなデータはUSBメモリで授受を行っていた。

「PCの端末は200台前後、全端末にLanscopCatを導入し、デバイス制御をしています。社内では専用端末以外USBメモリの使用を禁止しています。クライアントのデータ授受においてどうしても必要な場合にのみ、使用者が申請書を提出し、専用のセキュリティUSBメモリを貸出し、データの授受に関してはそのUSBメモリを使ってデータを顧客に渡し、その際受取書にサインをもらうという運用をしています。」

導入のポイントは強制暗号化

現在、クライアントとのデータ授受のために使用しているUSBメモリは15本。4年以上前にSdcontainer 2.0(旧イーディーコントライブ社製品)を10本採用し、さらにウイルス対策を強化させるため後継機のTRAVENTY V SuperVisionを5本購入した。

「導入当時は暗号化された領域を開いてそこにデータを保存するものがほとんどで、強制的に暗号化できるタイプ

はみつかりませんでした。

クライアントに通常のUSBメモリで暗号化をお願いするわけにもいかないのので、インストール不要で強制的に暗号化するイーディーコントライブ社のセキュリティUSBメモリが運用に適していました。」と選定のポイントについて海田氏は語る。

ハードウェア暗号化

書き込まれるデータは全てコントローラを経由して強制的にハードウェア暗号化 (AES256bit) されます。利用者が意識することなく、すべてのデータの暗号化が行えます。



利用可能なPCはシステム部の専用端末のみに限定

セキュリティUSBメモリの貸出期間はLanscopCatで設定。基本的に長いスパンでは貸さない。通常貸し出したUSBメモリは2~3日で返却される。

パスワードは設定しておき、貸出の際に教える。また、USBメモリに保存したデータは情報システム部の専用の端末でのみ社内へデータを保存することが可能だ。

クライアントから受け取ったデータはシステム部の決められた専用端末から読み込む。

「社内のPCでは運用ポリシー上USBメモリは使えないため、システム部へ一旦データを預け、システム部側でサーバにデータを上げて作業をします。そのためユーザから運用が面倒だと言われることはありますが、USBメモリの使い勝手に関しては特に問題はありません。TRAVENTY V SuperVisionシリーズでは、TRAVENTY 管理者ツールで詳細なポリシーをUSBメモリに反映させることができるので以前の製品に比べ、使い勝手は良くなりましたね。」



ウイルス検知ソフト搭載、 TRAVENTY V SuperVisionを採用

同社はSdcontainer 2.0の後継機としてウイルス検知機能搭載のTRAVENTY V SuperVisionを採用。USBメモリを介して広がるウイルス感染被害についてどのような対策をしているのか。

「基本的に顧客持ち込みのUSBメモリの使用はNG。以前、ウイルス感染したデータを持ち込まれたことがありました。預ったデータは専用端末で一回チェックしてからサーバにデータを挙げることにしているので水際で防ぐことができました。」

ウイルス検知機能搭載 (Vシリーズのみ)

トレンドマイクロ社製USBメモリ用ウイルス対策ソフト「Trend Micro Security™ for Biz (TMUSB)」は、USBメモリに書き込まれた不正ファイルを自動的に検知/隔離をします。



「ただ、社外でデータを受け渡す際に接続するPCが、必ずしも安全な環境かどうかはこちらではわからないので、セキュリティ対策として、トレンドマイクロ社のウイルス検知ソフトTMUSBが搭載されている、TRAVENTY V SuperVisionを採用しました。」

厳正なデータ管理

クライアントの大切なデータを預かる同社はシステムで情報を厳正に管理。コスト削減の要として新たに展開が進むクラウドサービスも今後の情報管理における重要な課題だ。

「懸念事項としては、会社の外にはデータは持ち出さないことをポリシーとしているので、クラウドになると委託先にデータを預けることになり、社のポリシーに反することになる点です。

ですので、コストメリットがあることはわかりますがなかなかそこに預けようと思えません。」と今後の情報管理について、海田氏はその課題を語った。